

韓国都市集合住宅における居住者の入浴慣習の実態と 入浴空間の住様式的検討 (第2報) 浴室関連空間の使用状況とその問題点

任 喜 敬, 今 井 範 子*

(光州大学校家政大学, * 奈良女子大学生生活環境学部)

平成7年6月30日受理

The Actual Conditions of Bathing Habits of Residents and an Investigation of Bathrooms in Urban Apartments in Korea (Part 2) The Actual Conditions of Bathroom and Their Problems

Hikyung LIM and Noriko IMAI*

Faculty of Home Economics, Kwangju University, Kwangju, 502-703

** Faculty of Human Life and Environment, Nara Women's University, Nara 630*

The object of this study is to analyze the actual use of and the problems of bathrooms in urban apartments which have two bathrooms (one main bathroom and one attached to the main bedroom) in Korea.

1) There are some problems with the present western style bathrooms which have three different facilities in the same room; a toilet, a bathtub, and a washstand. Twenty-five percent of the respondents use the bathtub as a water tank or a storage. A toilet not combined with a bathtub as well as some dressing space are desired for the main bathroom.

2) A certain number of residents are satisfied with the present western style bathrooms. Those, who are not satisfied with the present type, desire some other types such as (1) an independent toilet not combined with a bathtub and a washstand, (2) an independent bathtub not combined with a toilet and a washstand, (3) respectively independent facilities of a dressing room, a bathroom, a toilet, and a washstand.

3) Many residents of young age satisfied with the bathroom attached to the bedroom.

(Received June 30, 1995)

Keywords: urban apartment 都市集合住宅, western style bathroom 洋式浴室, Korea 韓国.

1. 緒 言

第1報¹⁾において、居住者の入浴空間として住宅内浴室と公衆浴場の双方を対象とし、居住者の入浴状況の調査分析により、韓国都市集合住宅における居住者の入浴意識と入浴慣習の実態を明らかにした。

第2報では、住宅内浴室として主浴室(化粧室)と内房^{ハジヤンシル}にある夫婦専用の内房浴室^{アンバム}をもつ集合住宅において、浴室の使用実態と問題点を明らかにすることを目

的とし、住様式の視点から入浴空間の検討を行う。

なお、ここでいう主浴室は浴槽、洗面台、便器が1室となっている家族用の浴室であり、内房浴室は洗面台、便器、シャワー設備が備えられている内房にある夫婦専用の浴室を指している(図1)。主浴室の場合、浴槽、洗面台、便器が1室となっている形式が韓国の集合住宅では一般的であり、浴室形式として9割以上を占める形式とされている²⁾。

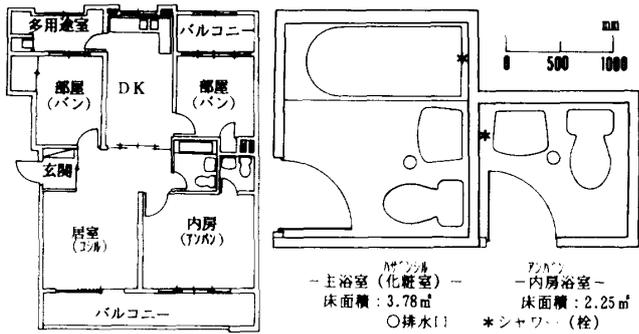


図1. 調査対象住宅の浴室空間

大洲3LDK 延べ床面積84.9㎡.

2. 研究方法

調査概要は第1報¹⁾で述べたとおりである。なお、第1報¹⁾で公衆浴場と住宅内浴室の入浴状況において数量化Ⅲ類を用いて分類し、クラスター分析より得られた入浴慣習類型を、タイプⅠ(住宅内浴室・公衆浴場利用積極型；公衆浴場を利用しながら住宅内浴室の利用も多く、入浴に対して積極的である)、タイプⅡ(住宅内浴室利用積極型；公衆浴場は全く利用しない、あるいはほとんど利用しなく、住宅内浴室の利用が多い)、タイプⅢ(公衆浴場利用積極型；住宅内浴室よりも公衆浴場を積極的に利用する)、タイプⅣ(住宅内浴室・公衆浴場利用消極型；全体的に入浴に対して消極的である)と表記する。型分けの詳細は第1報¹⁾を参照されたい。

3. 結果および考察

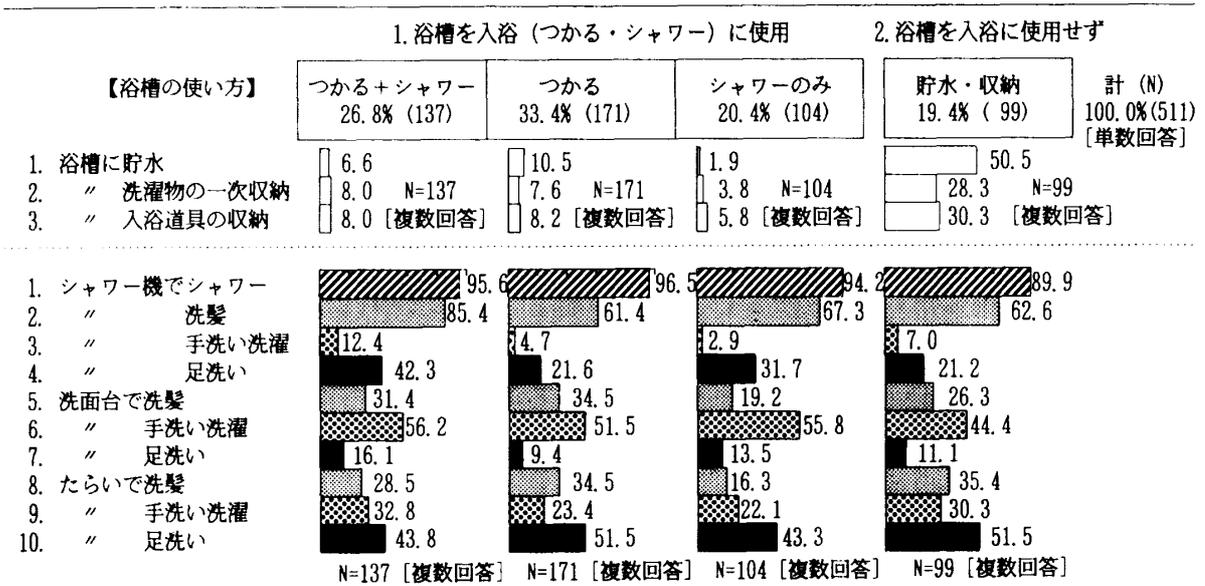
(1) 主浴室について

1) 主浴室の使い方(図2)

まず、主浴室にある浴槽の使い方をみると(図2・上)、全体として8割が入浴(湯につかる入浴とシャワー入浴を含め、以下入浴と称する)に使用している(単数回答)。しかし一方では、浴槽を貯水や収納に使用している者が、全体の約2割存在し、少なくない。これは、浴槽を本来の入浴には使わず、他の用途に転用している例である。図3は、住み方と浴室空間の典型的な使い方を採取した事例である。事例③は、浴槽を本来の利用目的である入浴に使わず、断水時の貯水のために転用している例である。

一方、浴槽を入浴に使う家において、脱衣後の洗濯物の一次収納に浴槽を転用している例が存在するが、脱衣室が設けられていないためである(図3、事例①)。また季節別に入浴状況に違いがあることから、入浴に使わない時に、貯水や入浴道具(たらいなど)の収納に浴槽を転用している(図3、事例④)。

第1報¹⁾で述べたように、韓国人の入浴習慣をみると入浴の仕方が季節によって異なり、春・秋季、冬季には入浴回数が週2、3回程度、週1回程度であるため、入浴行為とは別に、洗髪と足洗いの行為が行われる。このようなことから、主浴室の設備として浴槽以外に、シャワー機と洗面台、また浴室には普通入浴道具としてたらい(直径35~40cm程度)があることか



単位：% (不明のぞく)

図2. 主浴室の使い方

韓国都市集合住宅における居住者の入浴慣習の実態と入浴空間の住様式的検討 (第2報)

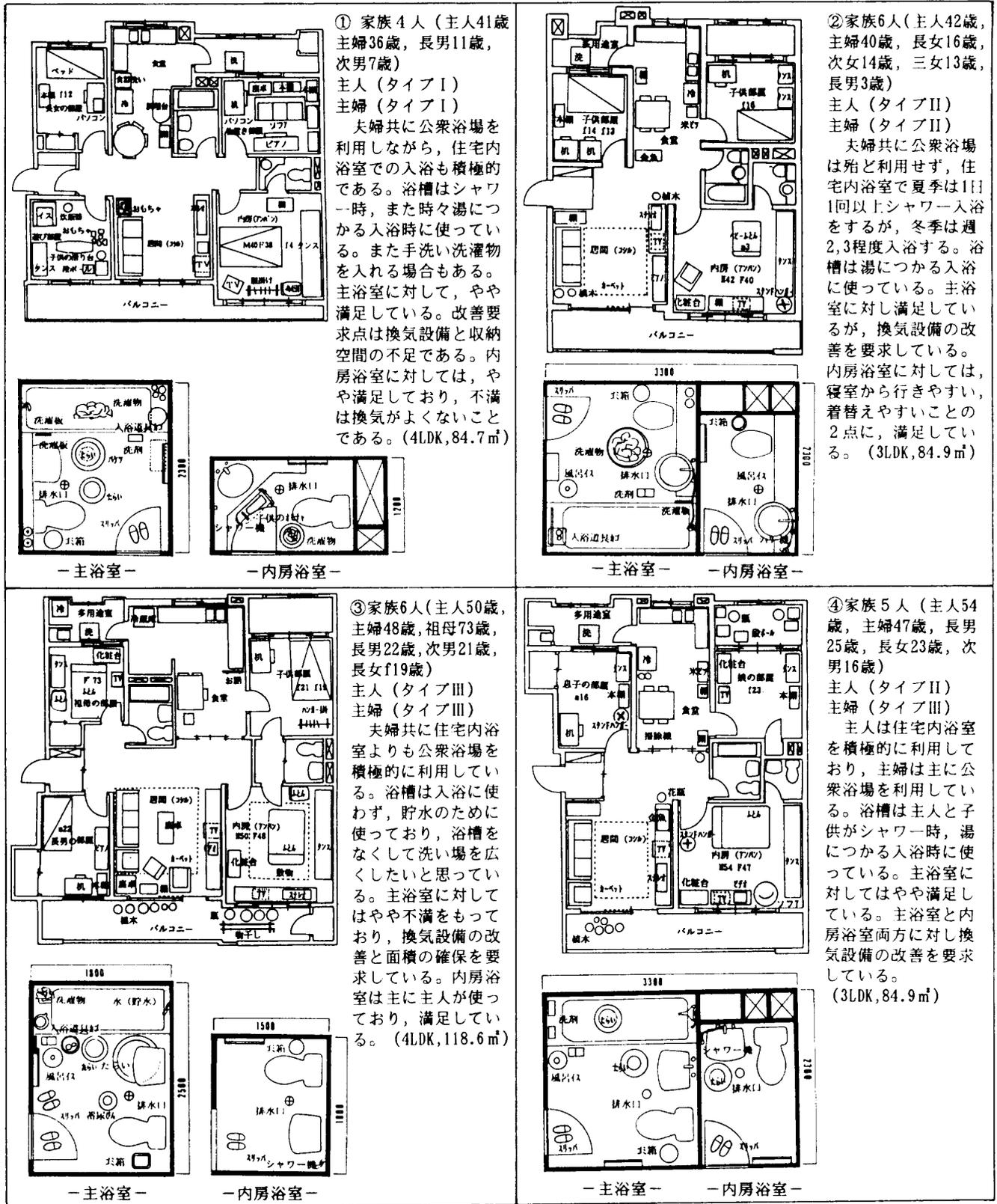


図3. 浴室空間の使われ方の事例

ら, それぞれの使い方を, 浴槽の使い方別に分けてみたものが図2・Dである。まず, シャワー機は主にシャワーによる入浴と洗髪に使っており, さらに足洗いに

も使われている。一方, 浴槽を入浴に使わず, 貯水や収納に使う家においても, シャワー機がシャワー入浴に使われており, 浴槽の中でなく, 洗い場でシャワー

している例もある。

次に、洗面台は手洗い洗濯に多く使われている。また、洗髪にも使用しているが、洗面台で洗髪行為を行うことは既往研究²⁾と同様の傾向である。さらに、必ずしもよい使い方とは言えないが、洗面台を足洗いに使用する例もみられる。一方、たらいの用途をみると、足洗いに最も多く使っているが、事例②のように、洗髪と手洗い洗濯にも多く使っており、浴室において欠かせない道具としてたらいを多用していることがわかった。たらいの用途のうち、洗髪に使用することは既往研究²⁾と同様の傾向である。また、浴室空間の使われ方の事例をみると、たらいや、脱衣物の一次収納、洗濯用具などが浴室に置かれており(図3, ①~④)、上記のような行為が浴室で行われていることがよくわかる。なお、浴室の洗い場は上記の洗い場でのシャワー入浴や、手洗い洗濯をするための排水口があり、床が濡れていることから、一般的にスリッパを常用している(図3, ①~④)。

以上のように、主浴室は入浴、洗髪、足洗いのための空間として利用されている。さらに、手洗い洗濯も多く行われている状況が認められ、主浴室は洗濯空間として併用されていることがわかる。

さらに、表1は浴槽の使い方を年齢別、入浴慣習の類型別(調査対象が主婦であるため、入浴の類型は主婦の類型でみている)、家族人数別、家族型別に示したものである。まず、浴槽の使い方は年齢別に違いがみられ(χ^2 検定 $p < 0.01$, *), 浴槽を入浴のために使う家は若い世代で多く、一方、浴槽を入浴に使用せず、他の用途(貯水や収納など)に使う家は年齢の高い世代で多くなっている。これは第1報¹⁾で述べたように、若い世代ほど公衆浴場の利用の程度が低く、かわりに住宅内浴室の利用の程度が高いためである。なお、クロス集計を行い、 χ^2 検定において有意水準 $p < 0.001$, $p < 0.01$, $p < 0.05$ で関連性がある場合は、それぞれ***, **, *で表す。表中の表記も同様である。

つぎに、類型別にはタイプII(住宅内浴室利用積極型)が入浴のために使う割合が高い反面、他の用途に使う割合は他のタイプよりも低い。住宅内浴室をよく利用しているためである。一方、タイプIII(公衆浴場利用積極型)とタイプIV(住宅内浴室・公衆浴場利用消極型)は、他の用途に使う割合が高い。以上のように、居住者の入浴慣習別に浴槽の使い方の違いがみられ、住宅内浴室をあまり利用しないタイプでは、浴槽を他の用途に転用している。

また、家族人数と浴槽の使い方とは関連性がみられ(**), 家族人数の多い家ほど浴槽を入浴に多く使っている。一方、家族人数の少ない家においては、浴槽を入浴以外に使う家が多い。家族人数の少ない家ほど、経済的な理由や家より簡単に入浴できるなどの理由から、公衆浴場の利用の程度が高く、住宅内浴室の入浴回数は少ないため(図略)、浴槽を入浴以外の用途に転用する家が多くなっていると考えられる。

さらに、家族型別に浴槽の使い方をみると(表1)、長子年齢7~13歳未満の居住者に、入浴に使う割合が高い。子供と一緒に公衆浴場を利用する場合、一般的に7歳未満の子供は性別に関係ないが、7歳以上の子供は男女別に利用する。ところが、7~13歳未満の子供が一人で公衆浴場を利用するのは難しいため、住宅内浴室における入浴が多くなり、浴槽が多く使われることになる。一方、13歳以上になると子供だけで公衆浴場を利用する機会が多いことにより、浴槽を入浴以外の用途に転用する割合が高い。また、夫婦のみの場合は他の用途に使う割合が3割を占めて高いが、第1報¹⁾で述べた公衆浴場の利用理由のうち、家より簡単に入浴できるという理由が多く、そのため公衆浴場の入浴回数が多くなっており、公衆浴場の利用が、浴槽の他用途への転用を高めていると考えられる。なお、図3の事例③は積極的に公衆浴場を利用している居

表1. 浴槽の使い方—年齢, 類型*, 家族人数, 家族型別—

		つかる シャワー	つかる	シャワー のみ	貯水 収納	小計(N)	χ^2 検定
年齢	40歳以下	26.3	39.7	20.6	13.4	100.0(209)	[*]
	41~50歳	26.7	32.1	18.6	22.6	100.0(221)	
	51歳以上	28.9	21.1	25.0	25.0	100.0(76)	
類型	タイプI	32.7	20.7	27.3	19.3	100.0(150)	
	タイプII	39.6	16.0	30.2	14.2	100.0(106)	
	タイプIII	31.8	22.1	25.3	20.8	100.0(154)	
	タイプIV	28.5	20.8	28.6	22.1	100.0(77)	
家族人数	2人	11.8	41.2	17.6	29.4	100.0(17)	[***]
	3人	20.6	25.4	33.3	20.6	100.0(63)	
	4人	34.1	22.6	29.6	13.7	100.0(226)	
	5人	37.8	13.5	20.3	28.4	100.0(148)	
	6人以上	40.0	16.4	29.1	14.5	100.0(55)	
家族型	夫婦	11.1	38.9	16.7	33.3	100.0(18)	[*]
	夫婦+長子 7歳未満	37.7	21.7	24.6	15.9	100.0(69)	
	夫婦+長子 7~13歳	37.0	19.6	32.6	10.9	100.0(92)	
	夫婦+長子 13~19歳	41.5	14.4	23.7	20.3	100.0(118)	
	夫婦+長子 19歳以上 世代家族	24.1	23.5	27.7	24.7	100.0(166)	
		35.1	18.9	32.4	13.5	100.0(37)	

単位: % (不明のぞく) ※主婦について
タイプI(住宅内浴室・公衆浴場利用積極型), タイプII(住宅内浴室利用積極型)
タイプIII(公衆浴場利用積極型), タイプIV(住宅内浴室・公衆浴場利用消極型)

韓国都市集合住宅における居住者の入浴慣習の実態と入浴空間の住様式的検討(第2報)

住者で、浴槽を入浴に使用せず、貯水に使っている例である。

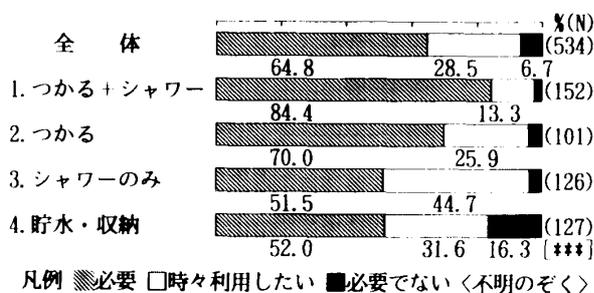
2) 浴槽の必要性について

浴槽を入浴に使わない居住者が存在することから、その必要性をたずねた結果、「必要である」が6.5割であり、「時々利用したい」が約3割で、全体として9割以上が必要としている(表2)。現在の浴槽の使い方からその必要性をみた結果、図4に示すように、入浴に使う者の必要度が高い(***)。一方、入浴に使わず、貯水や収納に浴槽を使う者は、入浴に使う者よりも必要度が低い。ところが、貯水や収納に浴槽を使う場合でも浴槽を必要とする者が半数を占めている。これは断水時のための貯水槽として、また脱衣室がないことから、洗濯物の一次収納空間として使おうとするためと思われる。しかし、韓国の集合住宅において、洗濯や台所関連の収納空間として多用途室の利用が確認されていることから、多用途室には貯水槽を、また浴室には脱衣空間を設けることによって、上記のように浴槽を転用することは浴室以外の空間で処理されることが考えられる。

表2は浴槽の必要度を入浴の類型別、家族型別に示したものである。まず、浴槽の必要度は公衆浴場を利用せず、住宅内浴室での入浴回数が多いタイプII(住宅内浴室利用積極型)が当然ながら高くなっている。

また、入浴に対し消極的なタイプIVにおいて浴槽の必要度が高くなっている。タイプIVの中には、浴槽を入浴のために使う者以外に、本来の使い方ではない貯水や収納に、転用するために浴槽を必要とする者が含まれているからと考えられる。

つぎに、家族型別に浴槽の必要度をみた結果、長子年齢7~13歳未満の居住者の必要度が高い。前述したように、浴槽を入浴のために使う家が長子年齢7~13歳未満の居住者において多いからである。



χ² 検定: [***] P<0.001, [**] P<0.01, [*] P<0.05 であり、以下の図表についても同様である。

図4. 浴槽の必要性—浴槽の使い方別—

以上みてきたように、浴槽を入浴に使う者と、公衆浴場を利用せず住宅内浴室での入浴回数が多い居住者に、その必要度が高くなっている。一方、浴槽を入浴に使わず、他の用途(貯水や脱衣後の洗濯物の一次収納)に使う者の中で、浴槽を必要としない居住者が存在していることがわかった。

3) 主浴室の満足度

主浴室に対する居住者の満足度をたずねた結果(表3)、全体として満足している者が約6.5割、不満をもっている者が3.5割であり、不満をもつ者が比較的多いといえる。

表3は主浴室に対する満足度を浴槽の使い方別、年齢別、類型別、家族人数別、家族型別に示したものである。まず、浴槽の使い方別にみると、浴槽を「入浴に使用」する者の方が、満足度が低い。浴槽を入浴に使う者ほど、脱衣空間がないため着替え服を置く場所や、便器に対する不浄感、換気設備の不十分などによると思われる。

また、主婦の年齢別に、主浴室に対する満足度をみると、51歳以上の居住者では満足している者が多い。一方、若い世代ほど不満をもっている者が多いが、第1報¹⁾でみたように、若い世代ほど住宅内浴室での利用が多く、浴室を入浴に使う者が若い世代に多いことによっている。

つぎに、主浴室の満足度と入浴の類型を、住宅内浴室での入浴回数が多い居住者(タイプIとタイプII)と、住宅内浴室での入浴回数が少ない居住者(タイプIIIとタイプIV)に分けてみると、入浴のための住宅内浴室の利用が消極的である居住者の方が不満をもっている者が多いが(*)、それらは入浴回数は少ない代わ

表2. 浴槽の必要性—類型*, 家族型別—

		必要	時々利用 したい	不 必 要	小計(N)	χ ² 検定
全 体		64.8	28.5	6.7	100.0(534)	
類 型	タイプI	57.6	34.8	7.6	100.0(158)	[*]
	タイプII	77.8	19.4	2.8	100.0(108)	
	タイプIII	58.8	32.1	9.1	100.0(165)	
	タイプIV	70.1	26.0	3.9	100.0(77)	
家 族 型	夫 婦	68.4	21.1	10.5	100.0(19)	
	夫婦+長子 7歳未満	60.9	34.8	4.3	100.0(69)	
	夫婦+長子 7~13歳	72.8	23.9	3.3	100.0(92)	
	夫婦+長子 13~19歳	60.6	31.5	7.9	100.0(127)	
	夫婦+長子 19歳以上 世代家族	62.1	29.4	8.5	100.0(177)	
		65.8	26.3	7.9	100.0(38)	

単位: % (不明のぞく) ※主婦について
タイプI(住宅内浴室・公衆浴場利用積極型), タイプII(住宅内浴室利用積極型)
タイプIII(公衆浴場利用積極型), タイプIV(住宅内浴室・公衆浴場利用消極型)

り、洗い場を利用して洗髪や手洗い洗濯、足洗いなどを行うことから、面積に対する要求や便所と浴室の分離要求が強く、それによる不満が多くなっていると思われる。一方、住宅内浴室での入浴回数が多い居住者においても不満をもっている者が3割を占めて多い。それらは入浴回数が多いため、浴室使用後の換気設備や脱衣空間の要求が多いことによると思われる。

以上のように、入浴状況に違いのある居住者がそれぞれ不満をもっており、3点1室の画一的な平面構成は居住者の入浴慣習を考慮していないものであることがわかる。

また、家族人数別に主浴室の満足度をみると、人数の少ない家においては、満足する者が多い。家族人数の少ない家においては、3点1室の平面構成であっても、浴室の同時使用による不便が生じないため、満足している者が多くなっていると考えられる。一方、家族人数の多い家ほど満足度が低い。それは3点1室の平面構成のため、同時使用による不便が一因となっている。

さらに家族型別に、主浴室に対する満足度をみると(*)、夫婦の場合は不満をもっている者が少ない。前

述の家族人数の少ない家ほど満足度が高い理由と同様の理由によっている。一方、長子年齢7~13歳の場合は満足している割合が最も低い。長子年齢7~13歳の場合は、住宅内浴室での入浴が多いことから、後述するように、主浴室の改善要求の中で浴室使用後の換気設備が不十分であることや収納空間の不足などが原因となっている。

4) 主浴室に対する改善要求

主浴室に対する改善要求をみると(図5)、「換気設備の不十分さ」が単数・複数回答いずれにおいても最も多い。ついで「面積の狭さ」、「浴室と便所の分離」、「収納空間の不足」などが存在する。これらの浴室に対する改善要求のうち、浴室と便所の分離を要求する居住者が多いことは既往研究⁴⁾と同様の傾向である。

図6は主浴室に対する居住者の満足度別に改善要求(単数回答)をみたものである。満足度との関連がみられ(***)、不満が高い者ほど、浴室と便所の分離要求が強く、3点1室であることへの不満が問題として存在している。これは日本人と同様に、便器に対する不浄感が存在する⁵⁾ことによると考えられる。さらに、3点1室の平面構成のため、入浴後に濡れた便器を入浴のたびに拭かなければならないわずらわしさによると考えられる。

表4は主浴室に対する改善要求を浴槽の使い方別、年齢別、類型別、家族人数別、家族型別に示したものである。まず、浴槽の使い方別に改善要求をみると、浴槽を入浴に使う家は、便所の分離と脱衣空間の要求が相対的に強い。一方、浴槽を入浴に使用せず、他の用途に使う家においては、面積の拡大の要求が強く、洗い場でシャワー入浴や洗濯、洗髪などを行うための、作業スペースの確保のためと考えられる。

また、主婦年齢別に、改善要求ををみると(表4)、便所の分離と脱衣空間の確保に対する要求は年齢に関

表3. 主浴室に対する満足度—浴槽の使い方、年齢、類型*, 家族人数, 家族型別—

		満足	やや満足	不満	小計(N)	χ^2 検定
全 体		17.6	47.3	35.1	100.0(524)	
浴槽使用	入浴*に使用	16.7	47.6	35.7	100.0(401)	
	入浴*に使用せず	21.4	44.9	33.7	100.0(98)	
年 齢	40歳以下	13.5	49.8	36.7	100.0(207)	
	41~50歳	17.9	47.0	35.1	100.0(234)	
	51歳以上	26.9	41.0	32.1	100.0(78)	
類 型	住宅内浴室積極	21.4	48.1	30.5	100.0(262)	[*]
	住宅内浴室消極	13.9	44.3	41.8	100.0(237)	
家 族 人 数	2人	27.7	55.6	16.7	100.0(18)	
	3人	26.2	41.5	32.3	100.0(65)	
	4人	18.5	44.2	37.3	100.0(233)	
	5人	13.4	51.7	34.9	100.0(149)	
	6人以上	12.5	50.0	37.5	100.0(56)	
家 族 型	夫 婦	31.6	52.6	15.8	100.0(19)	[*]
	夫婦+長子 7歳未満	20.3	42.0	37.7	100.0(69)	
	夫婦+長子 7~13歳	10.9	56.5	32.6	100.0(92)	
	夫婦+長子 13~19歳	16.4	54.9	28.7	100.0(122)	
	夫婦+長子 19歳以上	20.8	39.9	39.3	100.0(173)	
	世代家族	16.2	51.4	32.4	100.0(37)	

*入浴：つかる・シャワー 単位：% (不明のぞく) ※主婦について
 住宅内浴室積極：タイプI+タイプII, 住宅内浴室消極：タイプIII+タイプIV
 タイプI(住宅内浴室・公衆浴場利用積極型), タイプII(住宅内浴室利用積極型)
 タイプIII(公衆浴場利用積極型), タイプIV(住宅内浴室・公衆浴場利用消極型)

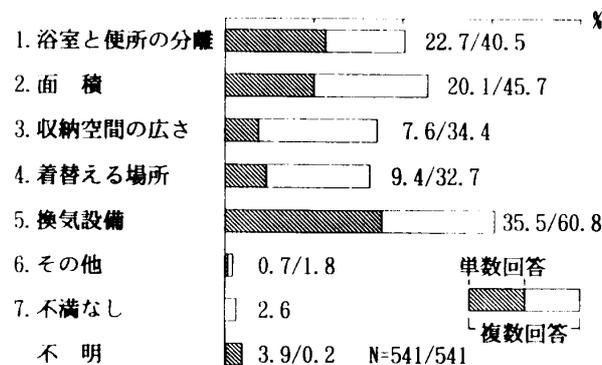


図5. 主浴室に対する改善要求の内容

韓国都市集合住宅における居住者の入浴慣習の実態と入浴空間の住様式的検討（第2報）

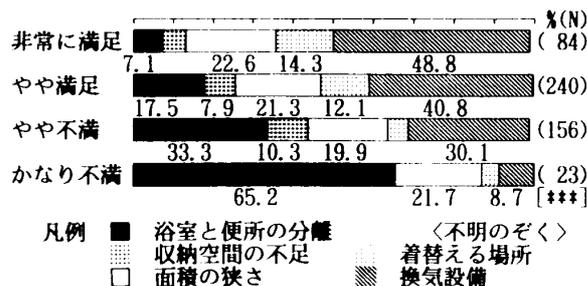


図6. 主浴室に対する改善要求の内容—満足度別—

係なく、一定の割合で存在する。

浴槽を、脱衣物の一次収納に使用する居住者が存在し、このような脱衣物の一次収納のためや着替え服を置くための空間を必要とすることから、その空間としても、脱衣空間の要求が生じていると考えられる。このことから、現在のような3点1室だけでなく、平面構成の異なる浴室空間が求められよう。

さらに入浴の類型別に改善要求をみると（表4）、タイプI（住宅内浴室・公衆浴場利用積極型）とタイプII（住宅内浴室利用積極型）は脱衣空間の要求が他のタイプに比べると高い。このことから、住宅内浴室での利用が多い居住者ほど、脱衣空間を要求する者が多いことがわかる。一方、タイプIII（公衆浴場利用積極型）は面積の狭さをあげる者が多く、このことが広々とした公衆浴場を利用する一因であると考えられる。

次に、家族人数別に改善要求をみると（表4、*）、家族人数が多い居住者ほど複数による同時使用のため、面積に対する要求が強くなっている。限られた朝の身仕度の時間帯は、便所の使用時以外、洗面、洗顔行為は洗面台とたらいの双方を用い、家族が複数で同時に行う状況が韓国では一般的である。そのため家族人数の多い居住者ほど面積に対する要求が多くなっていると思われる。

以上みてきたように、まず、主浴室に対する改善要求は設計自体の問題が多く、面積や設備の改善が必要とされていることがわかった。またそれに加えて、浴室と便所の分離や脱衣空間の要求が多く、3点1室という形式が現在一般的な韓国集合住宅の主浴室の形式であり、それによる画一的な平面構成からの問題が存在していることがわかった。これらの改善要求は、年齢別、居住者の入浴慣習、家族人数別にその内容に違いがあり、それらを踏まえて、浴室空間の型を考える必要がある。

(2) 内房浴室について

表4. 主浴室に対する改善要求の内容—浴槽の使い方、年齢、類型*、家族人数別—

		便所分離	収納空間	面積拡大	脱衣空間	換気設備	小計(N)	χ ² 検定
浴槽利用	入浴*に使用	23.7	8.8	19.7	10.4	37.4	100.0(396)	
	入浴*に使用せず	20.4	6.5	30.1	8.6	34.4	100.0(96)	
年齢	40歳以下	23.8	9.2	18.0	11.7	37.3	100.0(206)	
	41~50歳	25.0	6.9	23.7	8.2	36.2	100.0(232)	
	51歳以上	21.3	8.0	21.3	10.7	38.7	100.0(75)	
類型	タイプI	17.6	5.9	21.6	11.8	43.1	100.0(153)	
	タイプII	25.5	11.2	17.4	15.3	30.6	100.0(98)	
	タイプIII	27.2	8.0	24.7	6.8	33.3	100.0(162)	
	タイプIV	26.3	10.5	19.7	5.3	38.2	100.0(76)	
家族人数	2人	33.3	6.7	13.3	20.0	26.7	100.0(15)	[*]
	3人	22.2	12.7	12.7	9.5	42.9	100.0(63)	
	4人	24.2	7.8	17.8	10.4	39.8	100.0(234)	
	5人	21.5	5.4	27.5	12.0	33.6	100.0(150)	
	6人以上	28.5	10.7	30.4	—	30.4	100.0(56)	

*入浴：つかる・シャワー 単位：% <不明のぞく> ※主婦について
 タイプI（住宅内浴室・公衆浴場利用積極型）、タイプII（住宅内浴室利用積極型）
 タイプIII（公衆浴場利用積極型）、タイプIV（住宅内浴室・公衆浴場利用積極型）

1) 満足度および満足理由

内房浴室に対する居住者の満足度をたずねた結果、「必要な空間であり、非常に満足」（39%）、「あった方がよい、やや満足」（53%）、「不必要な空間で不満をもつ」（8%）であり、全体として9割以上が満足し、主浴室よりもその評価は高いものがある。

内房浴室には洗面台、便器、シャワー機が備えられており、内房の私室化傾向*（主寝室化、調査対象の9割以上が主寝室として利用）のもとで、夫婦専用の浴室として設けられている。内房浴室を使用する家族としては、夫婦（6割）、主人のみ（1割）、主婦のみ（1割）であるが、一方では夫婦以外の家族も少なくない（2割）。それは3点1室の主浴室における同時使用による不都合を、内房浴室の便器や洗面台の使用で解消することを求めていると考えられる。

年齢別に内房浴室を使用する家族をみると（図略）、「夫婦」が使う場合に、51歳以上では55%に対し、40歳以下が65%と、41~50歳が64%となり、若い世代の方が「夫婦」で使う家が多い。また内房浴室の使用は、調査地域別に関連がみられ（***）、「夫婦」が使う場合に、光州の居住者（55%）よりもソウルの居住者（75%）の方が多く、そこで、若い世代に、また大都市ソウルの居住者の方に、夫婦専用の浴室として積極的に受け入れられる動向がうかがえる。

内房浴室に対する満足理由としては（図7）、「寝室から行きやすいし、着替えやすい」という理由が単数・複数回答いずれにおいても最も多い。ついで「夫婦生活に便利」、「家族に気がねなく入浴できる」という、

夫婦のプライバシーに関する理由が多く認められ、日本と同様に⁸⁾、寝室圏に浴室があることに対する肯定的な評価が認められる。

2) 浴槽の必要性について

内房浴室には便器と洗面台、そしてシャワー設備はあるが、浴槽が設けられていないことからその必要性をたずねた。シャワーをする場合に面積の制約から、トイレット・ペーパーが湿ったり、便器が湿気のため不快になることなどが予測されるからである。内房浴室において浴槽の必要性について(表5)、「必要と思う」が約4割と、「時々必要と思う」が3.5割に対し、「必要と思わない」は2割であり、全体として7割強が必要としている。

つぎに主婦の年齢別にその必要性をみると(表5)、若い世代で「必要と思わない」とする者が相対的に少ないが、第1報¹⁾で述べたように、高年齢階層よりも住宅内浴室の入浴が多く、そのため必要とする者が多いと考えられる。

また入浴の類型別にみると(表5)、タイプII(住宅内浴室利用積極型)の必要度が、他のタイプよりも高い。タイプIIは公衆浴場よりも住宅内浴室の入浴回数が多いためである。

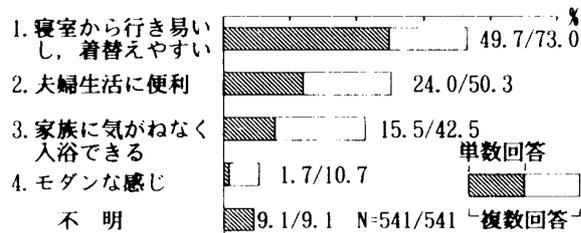


図7. 内房浴室に対する満足理由

表5. 内房浴室における浴槽の必要性—年齢、類型別—

		必要	時々必要	必要	小計(N)
全体		39.5	36.2	24.3	100.0(511)
年齢	40歳以下	37.4	39.4	23.2	100.0(203)
	41~50歳	41.0	34.8	24.2	100.0(227)
	51歳以上	40.2	31.2	28.6	100.0(77)
類型	タイプI	39.6	35.1	25.3	100.0(154)
	タイプII	45.6	36.9	17.5	100.0(103)
	タイプIII	41.4	32.5	26.1	100.0(157)
	タイプIV	34.7	41.7	23.6	100.0(72)

単位：% (不明のぞく) ※主婦について
 タイプI(住宅内浴室・公衆浴場利用積極型)、タイプII(住宅内浴室利用積極型)、タイプIII(公衆浴場利用積極型)、タイプIV(住宅内浴室・公衆浴場利用積極型)

主浴室にある浴槽の使い方と内房浴室において浴槽の必要度(全体として8割が必要としている)には、関連がみられる。主浴室において、入浴方法別に湯につかる入浴をしている者ほど必要度が高く(図8、*)、内房浴室もそのように使いたいという要求の表れと考えられる。夫婦専用の浴室として、その有用性を高めるため、浴槽を設置した内房浴室が考えられる。

3) 内房浴室に対する不満点

内房浴室に対する不満としては(図9)、「換気設備の不充分さ」と、「面積の狭さ」に不満が集中している。また、「収納空間の不足」、「掃除が大変」が存在し、「不満なし」は少ない。

内房浴室に対する満足度とこれらの不満点とは関連がみられ(*), 不満をもっている者はこれらのうちとくに「掃除が大変」という不満が多い。それは換気設備の不充分さからカビが発生しやすいため、入浴後の湿気を拭きとるという家事管理上のわずらわしさによることが考えられる。

表6は内房浴室に対する不満を年齢別、類型別に示したものである。まず、主婦の年齢別にみると(*), 40歳以下の若い世代では「換気設備の不充分さ」と「掃除が大変」という不満が相対的に多い。前述のように、内房浴室を使用する者が若い夫婦により多く、このように積極的に使う者ほど換気設備が不十分でシャワー後の湯気が抜け難いため、換気設備の不充分に

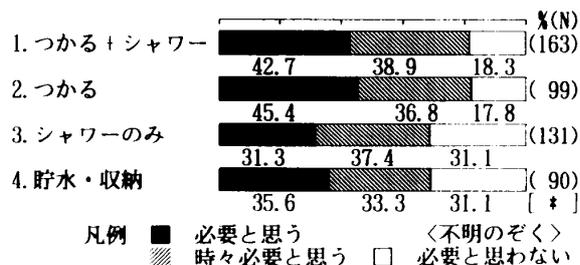


図8. 内房浴室における浴槽の必要性—主浴室の浴槽の使い方別—

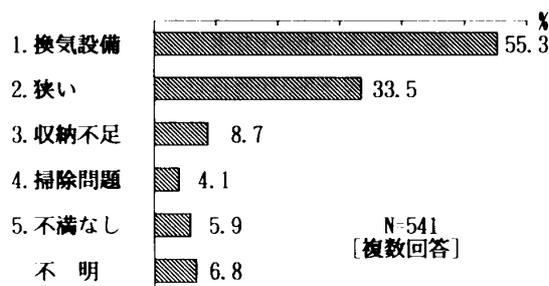


図9. 内房浴室に対する不満内容

韓国都市集合住宅における居住者の入浴慣習の実態と入浴空間の住様式的検討（第2報）

よる不満が極めて高いと考えられる。

また、入浴の類型別にこれらの不満についてみると（表6）、換気設備の不満は、公衆浴場の入浴回数が高いタイプⅢ（公衆浴場利用積極型）が他のタイプに比べて低いものの、類型別に違いはみられない。このようなことから、全般的に住宅内浴室の使用に伴う換気の機能が充分でないことを強く指摘していることがわかる。タイプⅢ（公衆浴場利用積極型）は主浴室と同様に面積に対する不満が多い。

一方、内房浴室を必要としない居住者は、全体の1割存在し、これらの居住者は年齢に関係なく公衆浴場の入浴回数が多い者と、住宅内浴室の入浴に消極的な者が多く占めている。さらに、内房浴室を必要としない居住者について、内房浴室が位置している空間に対する要求をみると、「浴室のかわりに内房に付属する収納空間にしたい」（必要としない者の約5割）、「浴室をなくしその面積分まで内房を広くしたい」（必要としない者の3割）、「二つの浴室の存在より主浴室の面積を拡大したい」（必要としない者の2割）ということを受けている。内房浴室の有用性が認められている一方で、これらのような要求をもつ居住者が存在していることがわかった。

以上により、前述の主浴室に対する改善要求や内房浴室における浴槽の必要性、さらに内房浴室を必要としない居住者の存在などを考え合わせると、現在の画一的な浴室空間の考え方から、図10に示すように、いくつかの新しい型が考えられる。

(3) 主浴室と内房浴室の型（図10）

まず、主浴室については、便所の分離や、脱衣空間を要求する居住者の存在を考え合わせると、脱衣室をつくりそこに洗面台を併置し、浴室と便所は別にするという、日本で一般的な、三つの機能を分離した型が

示唆される（図10の左、a）。浴室における入浴回数の多い居住者（タイプⅠ〈住宅内浴室・公衆浴場利用積極型〉、タイプⅡ〈住宅内浴室利用積極型〉）ほど脱衣空間の要求が多く、この型が対応すると考えられる。また、家族人数の多い居住者の場合は同時使用による不便があることから、この型が対応しよう。

一方、面積の制約から現在のような3点1室にする場合は、浴槽と洗面台の間にカーテンやパーティションなどを用いて空間を仕切ることが考えられる（図10の左、b）。

また、住宅内浴室でシャワーのみの入浴をする居住者や、浴槽を入浴に使わず他の用途（貯水や収納）に転用している居住者の存在から、浴槽のかわりにシャワー設備とする型が考えられる（図10の左、c）。この場合は、シャワー入浴をする空間と洗面台の間にカーテンやパーティションなどを入れて領域分離することが望ましい。なお、浴槽を貯水や、脱衣後の洗濯物の一次収納に転用している場合においては、多用途室に貯水槽を、浴室の中には脱衣物を置く棚などのしつらいをすることによって対応できると考えられる。

さらに、住宅内浴室よりも公衆浴場の利用が積極的な居住者（タイプⅢ〈公衆浴場利用積極型〉）や、入浴に対し消極的な居住者（タイプⅣ〈住宅内浴室・公衆浴場利用消極型〉）においては、図10の左、b、cの型が対応しうると考えられる。

つぎに内房浴室については、以下のようなことが考えられる。まず、内房浴室を必要としない居住者の存在から、内房浴室をなくして主浴室を充実させ、3機能を分離した主浴室が考えられる。

また、内房浴室に浴槽の設置希望が多いことや、湯につかる習慣を考慮すると、浴槽を設置した内房浴室が考えられる（図10の右、a）。この場合は、面積の制約から3点1室の形式にするが、便器に対する不浄感があることから、浴槽と洗面台・便器の間にしつらいを用いて空間を仕切ることが望ましい。同様に、現状の型についても領域分離をすることが望ましい（図10の右、b）。

(4) 平面における浴室の型

平面における浴室の型は、①主浴室のみの場合、②現状のように主浴室と内房浴室の両方がある場合の、2系統が存在することになる。前者の場合、前述したように、3機能を分離した型が対応する。そして後者の場合、主浴室と内房浴室の型は、入浴慣習や家族人数、家族型などの条件に対応したものがそれぞれ

表6. 内房浴室に対する不満内容一年齢、類型別[※]

		換気設備	掃除問題	狭い	収納不足	不満なし	計(N)	χ^2 検定
年齢	40歳以下	65.3	7.5	27.6	10.6	6.0	117.0(199)	[*]
	41~50歳	54.2	2.7	43.1	7.6	5.3	112.9(225)	
	51歳以上	59.2	1.3	36.8	11.8	9.2	118.3(76)	
類型	タイプⅠ	61.4	3.9	35.3	11.8	6.5	118.9(153)	
	タイプⅡ	60.2	6.1	30.6	6.1	7.1	110.1(98)	
	タイプⅢ	55.1	3.2	41.1	8.9	7.0	115.3(158)	
	タイプⅣ	60.6	7.0	36.6	9.9	2.8	116.9(71)	

【複数回答】単位：％〈不明のぞく〉※主婦について
タイプⅠ（住宅内浴室・公衆浴場利用積極型）、タイプⅡ（住宅内浴室利用積極型）
タイプⅢ（公衆浴場利用積極型）、タイプⅣ（住宅内浴室・公衆浴場利用消極型）

設定され、住宅平面において、浴室の組み合わせ型がいくつか存在しうることになる。

また、主浴室で行われている手洗い洗濯は多用途室（一般的に洗濯機が置かれている、後バルコニーを指す場合が多く、ほとんどガラス張りをし、内部空間化されている）に温水の使える洗濯槽を設置し、そこでその行為を行うことが考えられる。洗濯空間として多用途室の利用が確認されており⁴⁾、多用途室を洗濯専用の空間にすることによって、入浴空間として主浴室の専用性が高められる。

4. 要約

本報では、主浴室と内房浴室をもつ集合住宅において、浴室の使用実態と問題点を明らかにし、今後の韓国都市集合住宅の入浴空間のあり方を考察するために、住様式の視点から入浴空間の検討を行った。その結果は以下のとおりである。

(1) 主浴室にある設備として浴槽以外に、シャワー設備、洗面台、さらに入浴道具であるたらいの使用用途をみた結果、主浴室は入浴（シャワー入浴を含む）、洗髪、足洗いのための空間として利用されていることがわかった。さらに手洗いの洗濯空間として併用されていることが明らかになった。

(2) 主浴室の3点1室の形式について、次のような問題が明らかになった。(1)浴槽を本来の入浴に使わず、他の用途（貯水や、脱衣後の洗濯物の一次収納）に転用している例が一定の割合で認められたこと、(2)また、面積や設備の改善が必要とされていること、(3)さらに、便所の分離や脱衣空間の確保という平面

計画上の問題が存在していることがわかった。

(3) 現在の主浴室に対し、①満足している者が6.5割存在し、それは家族人数の少ない家に多いこと、②一方、不満をもっている者は3.5割存在し、画一的な平面構成に由来する不満が存在することが明らかになった。

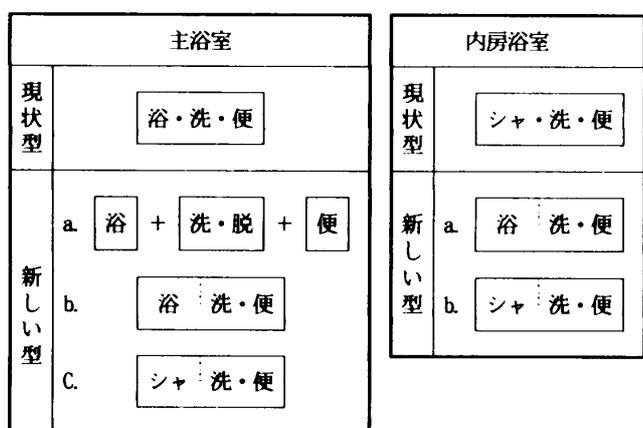
(4) 主浴室に対する改善要求は、居住者の入浴慣習、家族人数、家族型などによって内容に違いがあり、それらを踏まえると、次のような浴室空間の型が考えられる。(1)まず、現在の主浴室に対し、便所の分離や、脱衣空間を要求する居住者の存在を考え合わせると、脱衣室を設けそこに洗面台を併置し、浴室と便所は別にするという、三つの機能を分離した型、(2)面積の制約がある場合は、カーテンやパーティションなどのしつらいを用いて空間を仕切る型、(3)さらに、住宅内浴室でシャワーのみの入浴をする居住者や、浴槽を入浴に使わず他の用途に転用している居住者の存在から、浴槽のかわりに、シャワー設備とする型、以上三つの型が示唆される。なお、主浴室で行われている手洗い洗濯は、洗濯機のある多用途室に洗濯槽を設け、そこでその行為を行うことによって、入浴空間としての主浴室の専用性が高められよう。

(5) 内房浴室は、寝室圏にあることに肯定的な評価が認められ、若い世代に積極的に受け入れられる動向がみられる。一方、内房浴室に対しては、主浴室と同様に面積や設備の改善が必要とされている。

(6) 内房浴室については、次のようなことが考えられる。(1)まず、内房浴室を必要としない居住者の存在から、内房浴室をなくし、主浴室のみとし、その型は3機能を分離した型とすること、(2)一方で、現状の内房浴室に対し浴槽の設置希望が多いことや、湯につかる習慣を考慮すると、内房浴室に浴槽を設置した型が考えられる。この場合は浴槽と洗面台・便器の間にしつらいを用いて領域分離をすることが望ましい。

引用文献

- 1) 任 喜敬, 今井範子: 家政誌, **46**, 849~860 (1995)
- 2) 申 京珠, 鄭 京淑: 韓国生活科学研究 (漢陽大), No. 7, 161~185 (1989)
- 3) 任 喜敬, 今井範子: 家政学研究, **41**, 55~65 (1995)
- 4) 姜 淳柱, 金 相希, 住田昌二: 大韓建築誌, **25**, 47~57 (1989)
- 5) 今井範子: 住様式からみた住宅平面に関する研究, 京都大学学位論文, 317~351 (1986)
- 6) 任 喜敬, 今井範子: 日本建築学会計画系論文報告集, No. 473, 71~81 (1995)



凡例) 浴: 浴槽 (シャワー設備含む) 便: 便器 洗: 洗面台
 シャ: シャワー設備のみ 脱: 脱衣スペース
 □: 1室として独立 □: 1室の中で領域分離 □: 1室の中で連続

図10. 浴室関連空間の型